

【4-8 定性的システマティックレビュー】

CQ	5	妊娠・出産率を高める目的で、化学療法施行時にGnRHアゴニストを使用することは推奨されるか？
P	妊孕能低下の可能性のある乳癌薬物療法を行う際に、GnRHアゴニストを使用することが、その後の乳がん治	
I	乳癌薬物療法施行時にGnRHアゴニストを使用する。	
C	乳癌薬物療法施行時にGnRHアゴニストを使用しなかった患者。	
臨床的文脈		

O1	生児獲得率
非直接性のまとめ	1件のRCT、1件のsingle armのコホート研究がある。挙児希望の有無については不明である。
バイアスリスクのまとめ	コホート研究では一部患者の脱落がある。
非一貫性その他のまとめ	Single armのコホート研究とRCTであり比較は難しいものの、コホート研究でのGnRH投与後の生児獲得率は、RCTでGnRHを使用した群の生児獲得率を上回るものであり、一貫性はあると判断する。
コメント	生児獲得には患者が実際に妊活を行っているかや挙児希望の有無が大きく関わるため、解釈に注意が必要である。

O2	妊娠率
非直接性のまとめ	2件のRCT、1件のsingle armのコホート研究がある。挙児希望の有無については不明である。
バイアスリスクのまとめ	他癌腫が含まれており、背景因子には大きな差があるが、妊娠転記の比較においてはあまり問題にはならない。
非一貫性その他のまとめ	Single armのコホート研究とRCTであり比較は難しいものの、コホート研究でのGnRH投与後の妊娠率は、RCTでGnRHを使用した群の妊娠率を上回るものであり、一貫性はあると判断する。
コメント	妊娠には患者が実際に妊活を行っているかや挙児希望の有無が大きく関わるため、解釈に注意が必要である。 追記: RCTのメタアナリシスでは有意な差は認めなかった

O3	月経回復率
非直接性のまとめ	4件のRCTと2件のコホート研究、1件の症例対照研究がある。症例対照研究ではAFCを卵巣機能の指標としており、アウトカムとやや乖離することに注意が必要である。
バイアスリスクのまとめ	観察研究では基本的に交絡因子は調整されていないものの、RCTの報告も存在するため、評価をするうえで大きな問題にはならない。
非一貫性その他のまとめ	有効性を示すRCT3報と差がないとするRCT1報がある。観察研究でも有効性を示すものと差がないとするものがある。
コメント	月経の再開には患者背景などが大きくかわるが、有効性を示すRCTが多い。 追記: 4つのRCTのメタアナリシスで月経回復率は有意に改善していた

O4	費用
非直接性のまとめ	なし
バイアスリスクのまとめ	なし
非一貫性その他のまとめ	なし
コメント	費用について述べている論文は認めず、評価困難。

O5	QOL
非直接性のまとめ	なし

バイアスリスクのまとめ	なし
非一貫性その他のまとめ	なし
コメント	QOLについて述べている論文は認めず、評価困難。

O8	生存期間
非直接性のまとめ	乳癌患者の採卵の有無による予後を比較した1件のコホート研究を評価しており、介入方法に問題はない。
バイアスリスクの	バイアスリスクはない。
非一貫性その他のまとめ	非一貫性はない。
コメント	2008年の報告。